

鉄則：レポートは自分のメモ書きではない。相手に伝える報告書である。

◆技術文書（レポート）の書き方の基本 再確認

- ・ セクション見出しは文章にしない（名詞にする）。セクション見出しを空にしない。
- ・ インデントをつけて、全体的に見やすく体裁を仕上げること。

◆実験システム構成・結果

- ・ 実験指導書（手順書）の内容のコピーはいらない。
 - 自分のメモ書きではない。他の IT 技術者が読んで理解できるよう、この**実験固有の最低限の情報のみを漏れなく**記載する。目安として他人が再実験によって現象が再現できる情報が求められる。
 - 実験時の注意事項をレポートに書かない。（ケーブルを接続するときは**に気を付ける、とか）
 - やったことを現在形で書かない、完了形で書く。（一般的な事実については現在形）
- ・ 実験内容（測定対象システムの構成）と実験結果は分けるのが普通
 - 技術報告書や学術論文では、実験の方法(Method)と結果(Result)を分けて説明するのが普通である。
 - 読者は結果がどうだったか、**手早くまとめて知りたい**。（会社では上司・チームメンバーが読者）
 - 手順書の通りにレポートを作ると手順と結果が混ざり長くなる。結果が埋もれて見難い。
- ・ 結果、それに起因する考察について。
 - 実験方法を踏んで確認・得られたものが結果である。結果を見て即座にわかることは、**結果の図面とともに文章**で示す。結果の図は図番号を割り当て、本文中で参照し、説明を行う。これが「結果」。
 - 結果を比較してわかることや、文献調査を併せたものが「考察」。（その為の考察の章がある）
 - 複数の実験結果を俯瞰してみるためには、表・グラフにまとめ直すのが見やすい。
 - 測定値の単位に注意。Byte/s なのか、bit/s なのか、dBm なのか確認せよ。

◆考察

- ・ 実験レポートにおける考察とは、**実験データを基に論ずる事**。
 - 元となるデータを図番等で示し、そこから数値を引用して議論すること。（元のデータが分からないと議論にならない）
 - 考察には主観的な形容詞は不要、客観的な数値で示す。定量的な評価が客観性に繋がる。（例：ほとんど変わらない→違いは3%以内である、遥かに大きい→8倍大きい、など）
 - 「実験結果」を理解するためには、測定値を「理論」や想定と比較する必要がある。
 - 「理論上の最大値 ooMbps に対して実効通信速度は xxMbps (**%) であった」という見解が必要。
 - 想定と異なった結果の場合は、そのようになった理由を考察する必要がある。

◆課題

- ・ 「述べよ」とは単にテストの解答を書くわけではない。必要に応じて文献等を調べ、必要に応じて引用しながら、**自分の考えを文章で筋道立てて展開すること**である。調べた内容を根拠を示しつつ説明することである。

◆目的とまとめ

- ・ まとめ（結論）は、**目的に対応させて書くこと**
 - 目的は、「実際のネットワークの仕組みと通信能力を理解する事」。
 - 考察の結果、目的に対してどのような結論を導いたかを述べる。測定に関しては定量的に評価。
- ・ 目的に対して単に「理解した」、というのはあいまい。**目的を分解して、サブ目的にする**必要がある
 - サブ目的を達成することで、全体の目的を達成した、という意味合いのまとめが望ましい。